

「南無阿弥陀仏」は、亡き人との逢い言葉

おじいちゃん、おばあちゃん、お父さん、お母さん、夫や妻、そしてお子さんやお孫さん。親戚や友人知人、ご近所や仕事関係など。亡くなった方とのそれぞれの関係の中で、深い悲しみとともに、さまざまに思いが心の中を巡っておられると思います。

身近な死者が増えてきた

彼らに「やれたことよりも

してやれなかったこと」のほうがずっと多い【谷川 俊太郎】

身近な人が亡くなると、いつもこの詩のように心のどこかで後悔している私がいま。そして、ふと思うのです。生きることは、多くの人たちの死の別れがあり、いつかはこの私も死していくのちを生きているということ…。

草や木も 死とともに立っている

人間だけが それを知らない【藤代 聰磨】

死別は辛く悲しいことです。その悲しみの中でいのちの事実を知らされます。そして限られたいのちだからこそ、一人ひとりの存在の尊さや重さや深さを改めて感じ、同時に生に執着し死を恐れる私たちの姿も気づかされるのです。

朝には紅顔ありて

夕べには白骨となる身なり【蓮如上人】

いつだっていくか分からない毎日を私たちは生きています。だからこそ、この悲しみとおして、確かな人生を歩んでいくことが、阿弥陀仏や亡き人から願われているのです。

お葬式にあたり

人は必ず死ぬのだから、

いのちのバトンタッチがあるのです。

死に臨んで先に往く人が

『ありがとう』と云えば、

残る人が『ありがとう』と応える、

そんなバトンタッチがあるのです。

死から目をそむけている人は

見そ、こなうかもしれないですが、

目と目で交わす一瞬の

いのちのバトンタッチがあるのです。

『いのちのバトンタッチ』 青木新門

一、お通夜式次第

- ・ 帰敬式
 - ・ 表白
 - ・ 阿弥陀経(お焼香)
 - ・ 念仏
 - ・ 和讃
 - ・ 回向
 - ・ 法話
- (以上約30分)

二、お葬儀式次第

- ・ 伽陀
 - ・ 勸衆偈
 - ・ 念仏
 - ・ 回向
 - ・ 路念仏
 - ・ 表白
 - ・ 正信偈(お焼香)
 - ・ 念仏
 - ・ 和讃
 - ・ 回向
 - ・ 御文
- (以上約40分)

※式次第や勤行時間が変わることがあります。

「なむあみだぶつ」のお寺

浄土真宗(真宗大谷派・東本願寺)

林鶯山 憶西院 超覚寺

[SINCE 仏暦 2162 西暦 1619 元和 5]

〒730-0013 広島県広島市中区八丁堀 5-2

TeI & Fax 082-221-1234 ■ 090-9999-3113

HP <http://www.namuamidabutsu.com>

Mail wada@namuamidabutsu.com

お通夜・お葬儀のこころ

死は、否応なく自分に迫ってくる【いのち】の真実です。その真実の重さは、悲しみや戸惑いを生みます。そして、なかなか受け止められない自分があからさまになります。しかし、その悲しみを知らずに【いのち】への優しい眼差しが生まれるでしょうか？ また、今を生きていることを本当に喜ぶことができるでしょうか？ お葬式を御縁とし、痛みや嘆きという気持ちをも包んで、悲しみに心身を寄り添うところから、もう終わることのない新たな出逢いを、今、させていただいています。

…お葬式が仏縁になる瞬間です。

お葬式は、亡き人との最後のお別れの儀式であり、新しい仏（御先祖）様の誕生に立ち会う儀式でもあります。また同時に、人の「死」という重い事実を受け止め、今まで賜った恩徳に感謝の念を持つて御礼を申し上げる厳粛な儀式であります。身近な人の死という現実を、誰にも避けられない真実として真剣に受け止め、その人の生涯を偲びつつ、自分が生まれた意義を仏様の教えに問うていかなばなりません。そして、「生まれ、生きる」「老いる」「病む」「死ぬ」という人の予測できない真実を真摯に受け止め、穢土（現世・娑婆世界）に生かされているこの身に生きる喜びを見出すのです。

亡き人が人生の最後にその身をもってお教えくださった
「生あるものは必ず死ぬ」という真実を改めて確認し、
「人は必ず死ぬからこそ、今ある生を確かなものにしなさい！」
「死と隣り合わせで生きているあなたは、どう生きますか？」
という亡き人からの願い・問いに、お通夜・お葬儀を通して向きあうことが肝要です。

帰敬式

※お髪剃りとも言われ、「仏・法・僧」の三宝に帰依し、仏弟子としての歩みを誓い、法名をいただく儀式です。お葬式中の帰敬式は、仏様としての命名式です。

三帰依文

人身受け難し、いますでに受く。仏法聞き難し、いますでに聞く。
この身今生において度せずんば、さらにいづれの生においてか
この身を度せん。大衆もろともに、至心に三宝に帰依し奉るべし。

自ら仏に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、
大道を体解して、無上意を発さん。
自ら法に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、
深く経蔵に入りて、智慧海のごとくならん。
自ら僧に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、
大衆を統理して、一切無碍ならん。

無上甚深微妙の法は、百千万劫にも遭遇うこと難し。我いま見聞し
受持することを得たり。願わくは如来の真実義を解したてまつらん。

剃刀の儀の偈文

流転三界中 恩愛不能断 棄恩入無為 真実報恩者

通夜式表白

※「通夜」とは、夜を通して亡き人を偲び、静かにご遺体を見守るのが本旨です。
儀式は1時間も掛かりませんが、亡き人を想う大切なご縁になりますように…。

つらつらおもんみるに 生ある者は必ず死に帰し 盛んなる者もついに衰うる習いなり
たとい百年の寿命を保つとも 老いは覆うべくもあらず
しかれども 百歳の長寿 いと稀にして 我や先 他人や先 老少は不定にして
今日とも知らず 明日とも知らず まこと儂なきは人の世というべく
ここにまた 一つの生命閉じ 明日ははや葬送の日となりぬ
しかれば我ら 生前のよしみ深き者あいつどい
仏前に故人の遺体を安置し ねんごろに 通夜の勤めを行なう
今や 仏の御手に抱かれて 蓮の華に生まれし人
希わくは 遙かに照覧を垂れたまひ、この会座に還り来たりて
我らを導きたまわらんことを 超覚寺 釋隆恩 敬つて白す

通夜和讃(恩徳讃)

如来大悲の恩徳は 身を粉にしても報ずべし 師主知識の恩徳も ほねをくだきても謝すべし

葬儀式表白

※「葬儀・告別式」は、亡き人にお別れを告げる儀式ですが、それと同時に新しい仏様と出逢う場でもあります。「さようなら」ではなく、「ありがとう」とお見送りください。

おもうに 無常の嵐は 時をえらばず 処をさだめず
老少のへだて あることなし 然るに 恩愛の絆 いよいよ 断ちがたく
別離の情 また去りがたし

阿弥陀如来は かかる煩惱熾盛のわれらをあわれみたまひ、超世の悲願を立てたもう
まことにこの本願の力によらざれば いかでか出離生死の道あらんや

ここに法名() 今や往生の素懐を遂げて 不退の楽土に至る
本日 葬儀に当り 香華をそなえ 仏徳を讃嘆し 生前の遺徳をしのぶ
ただ願うらくは 遺族知友この機縁にあって いよいよ 深く真実の御教えを仰ぎ
撰取の光につつまれて 如来広大の恩徳を謝し 奉らんことを 超覚寺 釋隆恩 敬つて白す

葬儀和讃

本願力にあいぬればむなしくすがるひとぞなき 功德の宝海みちみちて 煩惱の濁水へだてなし
(如来浄華の聖衆は) 正覚のはなより化生して 衆生の願楽ことごとくすみやかにとく満足す

白骨の御文（本願寺第八代蓮如上人）

それ、人間の浮生なる相をつらつら観ずるに、おほよそ、はかなきものはこの世の始中終、まぼろしのごとくなる一期なり。

されば、いまだ萬歳の人身をうけたりといふ事をきかず、一生すぎやすし。いまにいたりてたれか百年の形骸をたもつべきや。我やさき人やさき。けふともしらずあすともしらず。をくれさきだつ人は、もとのしづくすゑの露よりもしげしといへり。

されば朝には紅顔ありて、夕べには白骨となれる身なり。すでに無常の風きたりぬれば、すなわちふたつのまなこたちまちにとち、ひとつのいきながくたえぬれば、紅顔むなく変じて、桃李のよそほいをうつしなひぬるときは、六親眷属あつまりてなげきかなしめども、更にその甲斐あるべからず。

さてしもあるべき事ならねばとて、野外にをくりて夜半のけふりとなしはてぬれば、

ただ白骨のみぞのこれり。あはれといふも中々をろかなり。されば人間のはかなき事は、老少不定のさかひなれば、たれの人もはやく後生の一大事を心にかけ、阿弥陀仏をかかくたのみまいらせて、念仏まうすべきものなり。あなかしこ、あなかしこ。

「白骨の御文」意識

そもそも人間の浮き雲のような移り変わりをよくよく観れば、最も儂いものは、この世に生まれてから死ぬまでのたちまち過ぎていく幻のような生涯であります。

だから、今まで二万年を生きた人など聞いたこともありませぬ。一生はアツという間に過ぎます。誰が百年間も同じ姿形を保てたでしょうか。死ぬのは、自分が先か他人が先か、今日か明日かも分かりませぬ。草木の根本の滴や葉先の露よりも多くの人が、長寿・短命の違いはあつても絶え間なく亡くなつていきます。

朝には血色の良い顔であつても、夕方には白骨になつてしまふかもしれない我が身です。ひとたび諸行無常の縁に遇えば、二つの眼はたちまちに閉じて、呼吸も永遠に途絶えて、紅顔はむなく変わり果て、桃李の花のように美しい容姿も失われてしまいます。親類縁者が集まり、どれほど嘆き悲しんでも、もはやどうにもなりません。

そうは申しても、そのままにはしておけないので、野辺に送つて火葬にすれば、夜半の煙りとなつて白骨のみが残るだけです。悲しいという言葉などでは、とても言い尽くせないのです。

このように人生の儂さは、老若の区別はないですから、誰も皆早く今後の人生の一大事に気づき、阿弥陀仏を深く信じて帰依して、念仏の日暮しによる確かな人生をお送り下さい。

以上まことに恐れ多くも尊いことを申しました。

還骨式表白

※「還骨」とは、火葬場から還つてきたお骨のこと。荼毘に付してお骨になった故人をお仏壇に迎える儀式で、お葬式を締めくくります。

敬つて 阿弥陀如来の御前に白してもうさく

本日ここに 当家親族一同と共に うやうやしく仏前を莊嚴し ねんごろに經典を讀誦して 法名（ ）の還骨勤行を修したてまつる

それおもんみれば 諸行無常の教えあり まことに 世の相 かたときも止ることなし

されば きのう今日までも 笑み 語りし生命尽き 野辺の送りを済ませば 今のはや 白骨のみとなりぬ まことに人の生命の儂さ、ここに極まるというべし

しかれども我ら このたびの悲しみを機縁として あらためて仏法に耳を傾け 念仏の慈悲に目覚めて 念仏成仏の道を歩まん 希わくは故人

遙かにみ仏の世界より影向して 我らを導きたまわんことを 超覚寺 釋隆恩 敬つて白す

浄土真宗とは

平安末期から鎌倉初期の僧侶、親鸞聖人を祖師とする宗派、それが浄土真宗です。

浄土真宗の教えを一言で言えば「南無阿弥陀仏」です。つまり阿弥陀仏に南無（帰依・信頼）し、阿弥陀仏の本願を信じ、お念仏申して仏になる教えです。

經典によると、阿弥陀仏は遙かな昔に老若男女善悪貴賤の差別なく、一切の衆生を救うとお誓いになりました。そしてその誓いを実行し私たちを極楽浄土に往生させるため、「南無阿弥陀仏」と称えるよう申されました。

「この私」が浄土真宗の教えに出遇うと、これまで「自分の力で生きてきた」と思い込んでいたのに、「生かされていた」事に気づかされて、四苦八苦（生老病死・愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦・五陰盛苦）をうなずけるようになります。

お経とは

「お経」は、お釈迦さまの教えの言葉です。その教えをただかかれた親鸞聖人が、感動をもってお作りになったのが「正信偈」です。お葬式で勤められますが、亡き人に捧げる呪文ではありません。悲しみの中にある私たちに、生まれた意義や生きる喜びとは何かを問いかけてくる言葉です。

【浄土真宗の心得】

- ◆お念珠（お数珠）は平素は左手に、合掌する際は両手に通し、阿弥陀仏と亡き人を念じて、お念仏「南無阿弥陀仏」をしつかり称えましょう。
- ◆威儀（服装）を正しましょう。
- ◆立ち居振る舞いが乱れぬよう、心を整えましょう。
- ◆お焼香の際も、お念仏を称えましょう。

法名とは

生前に仏弟子として生きることの証としていただくのが法名です。生前にいただいていない人が亡くなった場合は、通夜・葬儀にあたって住職からつけていただきます。浄土真宗の法名は、宗祖親鸞聖人が自らを「釋親鸞」と名のられて以来、「釋○○」「釋尼○○」の二字です。この「釋」の字は仏教をお説きくださいましたお釈迦さまの「釋」の字で、「仏の教えをもって人生を生きていく」ことを示し、仏法に帰依する全ての人々が等しく「釋」を名のる、平等な世界をあらわしているのです。

また、私たちは阿弥陀仏の本願力によって救われるのであって、自力に励んで戒律を保つことを必要としませんから、戒名とはいいません。

「清め塩」は不要です

私たちが生活の中で行っている風習には、宗教儀礼が慣習化されたものも多く混ざり込んでいます。清め塩も、死を穢れと見なすところから用いられてきましたが、疑問に思ったことはありませんか？ 塩で清める穢れたものとは、亡き人を指しているのです。つい先日まで大切だと思っていた方を、亡くなった途端に穢れたものとして取り扱い「お清め」するとは、何と残酷なことでしょうか。全く道理に合わない、痛ましいことです。お葬式自体も穢れる行為だと思われているということですから。そう考えても穢れたものになるのだということになりません。お葬式で塩を撒かれるような穢れたものになる為に私は今を生きている、ということなのでしょうか？

東本願寺の焼香作法

1 御本尊を仰ぎ見る。



2 お香を2回たく。
額に近づけるような、
おしいただく動作は行わない



3 合掌し、
お念仏を称える。



4 合掌を解き、
礼拝する。



真宗宗歌

- 一 ふかきみ法りにあいまつる
身の幸なになに たとうべき
ひたすら道を ききひらき
まことのみむね いただかん
- 二 とわの闇より 救われし
身の幸なになに くらぶべき
六字のみ名を となえつつ
世のなりわいに いそしまん
- 三 海の内外うらとのへだてなく
みおやの徳の とうとさを
わがはらからに 伝えつつ
みくにの旅を とともにせん
- 四 世界の国々 へだてなく
如来の徳の とうとさを
わがともがらと たずさえて
浄土の国に 生まれ往かん

きょうも死を見送っている
生まれては立ち去っていく今日の死を
自転公転をつづけるこの地球上の
すべての生き物が 生まれたばかりの
今日の死を毎日見送りつづけている

なぜなのだろう

「今日」の「死」という
とりかえしのつかない大事がまるごと
なんでもない「当たり前前事」のように毎日
毎日くりかえされるのは つまりそれは

ボクらがボクラじしんの死をむかえる日に
あわてふためかないようにとあの
やさしい天がそのれんしゅうをつづけて
くださっているのだと気づかぬバカは
まあこの世にはいないだろうということか

『れんしゅう』まど・みちお

生のみが我らにあらず
死もまた我らなり
我らは生死を
併有するものなり

清沢 満之

人を失った悲しみの深さは
生前にその人から
我が身に受けていた
贈り物の大きさであった

宮城 顛

悲しみの深さが
そのひとの深さだ
その深みから
呼びかけられて
私は歩く

『呼びかけ』浅田 正作